

# ココロにサプリ

広報メディア研究所代表 上野 弘子

第120回

寄付の行方



ルには、100人ほどが着席しており、iPS細胞の生みの親であり、所長を務める山中伸弥教授の講演が始まっていた。受付の人に案内してもらい、私は後ろのほうの席に静かに腰をおろした。

この日、私が研究所を訪れたのは、寄付者感謝の集いに出席するためだった。

一昨年、わずかな金額ではあるが研究基金に寄付をしたのだ。

山中教授は、何年も前からメディアに登場するたびに、寄付の協力を呼び掛けている。講演を聴きに行っても、いつも最後は決まって寄付のお願いだ。

専門の研究所を国に用意してもらい、研究資金は潤沢にあるように思える。それなのにノーベル賞を受賞したような立派な人が、なぜ、あちこちで頭を下げてまで寄付を集めなければならぬのか。どう考えても不思議だった。

しかし、いくつかの研究機関で再生医療に関する研究倫理委員を長年務めている私は、お役に立てるものなら…と遅れ



京都大学iPS細胞研究所

ばせながら寄付をすることにした。

ところが、一体、どれくらいの金額を寄付すれば良いのか見当がつかない。そこで研究所のホームページをチェックしてみたが目安となる金額はわからない。

意を決して研究所に直接電話で問い合わせをしてみたが「お気持ちで結構です」との返事。「でも、普通は目安として100千円とか10万円とか、あるじゃないですか。皆さん、どうされているのですか?」としつこく聞くと、担当の女性はちょっと困ったように「本当にお気持ちで結構なんです。300円の方もいらっ

京都市内は氷雨が降っていた。JRの到着が遅れたため、タクシーで駆けつけたのだが、定刻を少し過ぎてしまった。

京都大学iPS細胞研究所1階のホー

しゃいますので」と答えるではないか。思わず「300円?」と聞き返すと「それは、ご自身が難病のお子さんで、お小遣いを寄付してくださいなんです」。

私は自分がとても恥ずかしいことをしているような気持ちになり、お礼を述べて電話を切った。

金額ではない、気持ちなのだ。自分にとって無理なくできる範囲で協力をすれ



研究所の入り口で挨拶をする山中伸弥教授  
Dec.2015 KYOTO

ば良いのだ。それが寄付をするという行為なのだ。

すぐに私は「私の気持ち」に値する金額をインターネットで寄付した。

1週間後、寄付金額収書と京都大学総長の挨拶文、そして山中教授の直筆サイン入りの感謝状が郵送されてきた。それだけでも驚いたのだが、その数カ月後、感謝の集いの案内がメールで届いたのだ。

その年度に寄付をした人を対象に、大阪、東京、京都の3会場で開催されるということだったので、私は京都を選択した。

当日は、山中教授による研究の進捗状況の説明の後、事務方から寄付の総額と使途について図表を用いた説明があった。研究者を支える大勢のスタッフの雇用や特許に関する係争などの資金が圧倒的に不足しており、寄付金の半分ほどがそれらに充当され、残りは有事の際のためにプールされるということだった。

納得のいく説明の後、グループに分

かれて山中教授と一緒に記念撮影。寄付者の中には車いすの少年や白い杖をもった少女、酸素吸入器をつけた人もいて、新しい治療への期待の大きさがひしひしと伝わってきた。

その後、お茶とクッキーをいただきながら、山中教授をはじめ、多くの研究者と直接話をする時間も設けられており、1時間半ほどの集いだったが充実したひとときを過ごすことができた。

寄付をしても誰のためにどう使われるかわからないケースが多い中、使途の説明や研究の進捗状況を直接聞くことができたのが何より良かった。

帰路、雨上がりの京の山々から天に向けて霧が立ち上り、その隙間から陽光が差し始めた。

美しい景色を眺めながら、私は難病に苦しむ人々のため一日も早くiPS細胞を使った治療法が確立できるように、と心から願った。